

#### 【三陰三陽の考え方 4 最も多い少陽病】

さて、私が外来診療の場でもっとも多く出会うのは少陽病の患者さんです。

漢方の教科書である傷寒論（しょうかんろん）では少陽病の概念として「口苦（こうく 口が苦い）、咽乾（いんかん 口渇と異なり喉の乾燥感）、目眩（もくげん 難聴やめまい）アリ」と述べられています。これらは自覚症状で、他覚的には、脈は弦であり腹診上、肋骨弓下および心窩部に抵抗があります。

急性熱性疾患の経過では往来寒熱（おうらいかんねつ：熱が出たり下がったり）を来す時期です。「病位ハ半表半裏（はんぴょうはんり）」にありと述べられていますが、心臓、呼吸器、消化器、腎臓などの内臓障害を伴った病態と理解してよいでしょう。従って食思不振（陽明病位のように食べられない状態でなく、食べたくない状態）が自覚症状の基本症状となります。

具体的な病名では、肺炎や胸膜炎にみられる胸脇部の圧重感、疼痛また慢性の肝・胆・膵炎にみられる上腹部全般のつまった気持ち悪い感じや鈍痛・抵抗、右心不全の際の呼吸困難（かつて心臓喘息とよばれた病態）、浮腫、腹水貯溜などの症候があります。この病位の薬方としては、消炎、解毒、利尿が中心になり、柴胡（さいこ）剤が繁用されます。しかし苓朮（りょうじゅつ）剤、瀉心湯（しゃしんとう）類、木防己湯（もくぼうい）なども与えられます。